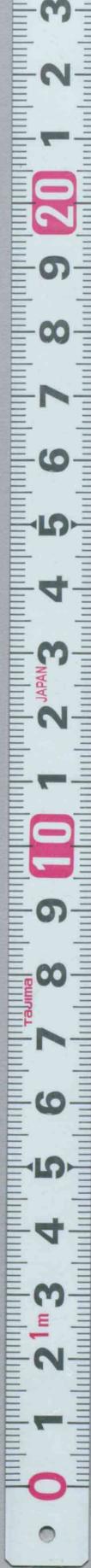


入 孫
瑞華堂取譚

三島郡
水嶋
半村

初篇

K289
KA86
727



K289
KA86
227

三
高
水
印
封

聞音惠

蓮
華

勤學道是沙駝字

入瑞華聖取譚

明治十五年七月廿九日

法音

粹江道墨書



繪瑞華叢談初篇

目次

- | | | |
|-----|---------------------|-----|
| (一) | 群馬縣令榊取素彦君の婦人 | 初丁 |
| (二) | 福島縣平民中村佐平次 伊達郡梁川村の人 | 九丁 |
| (三) | 肥前國伊万里の陶器商深川榮左衛門 | 十二丁 |
| (四) | 同國小城郡手津驛水田善助 | 十四丁 |
| (五) | 安藝國佐伯郡葛原村日下周平 | 十五丁 |
| (六) | 上州高崎田中きく女 | 十七丁 |
| (七) | 江州神崎郡林村某 | 十八丁 |
| (八) | 廣島縣安藝國沼田郡南下安村大下力三郎 | 二十丁 |

(九) 山口縣下長門國阿武郡秋赤川任の母おみち

二十二丁

(十) 千葉縣下安房國長狹郡天津村富川總兵衛

三十三丁

以上

入 瑞華叢談 初篇

(一) 群馬縣令榊取素彦君の婦人



婦人某氏は長州萩松本村の人杉氏の女にて吉田松
 陰先生の妹なり女工の外に文學を兼たる才女にし
 て氣象雄々しく實に婦中の丈夫とも謂つべし從來
 杉氏の一族ハ大抵眞宗の流れを汲み御法義を信ず
 る者多き中にこの婦人ハ常々島地赤松金山諸氏の
 教示を受られ深信厚歸の人なり榊取氏に嫁して二
 男を擧げ長ハ家と繼ぎ次ハ出て久坂氏と繼がれけ
 るがこの婦人去十一年の十二月頃病痾に罹り最と

危篤に折節の二男の嫁なるおたかおみすの兩女
へ左の遺書を認めて指示されたりと然るに翌年に
至り病も漸やく快癒し今ハ正しく家事を督正せら
るゝよし且彼群馬の地なる殘暴を風とし殆んど無
教國ともいふべき土地なるが近來教會の盛んに開
け御法義の大に行ハるゝ分野も及びたるハ全く此
婦人の力多きに居るといふ

遺書

我が真宗の法義ハ辱なくも全國無二の教法にし
て我等如き一文不通の者にも聞ひらき易き他力

本願に候へば能く心を止め聽聞すれば御慈悲に
て候間信心ハ頂かると御示にて自然と心中に
御入満ち下さるゝ他力不思議に御えたらきにて
凡夫の力をえげまぞ只我身の淺ましくつたなく
罪障ふかき事を思ひ知りかゝる機を助け玉ふ佛
の廣大なる願力を疑ひなく信じ罪も障りもみな
御佛に任せ奉つりて往生の大事を安堵するはか
りと聽聞申し候に此往生の大事を安堵せし上ハ
身をも心をも慎しみさす手引く手に氣を附け國
を思ふ心も厚く家を治め夫を敬まふ心も深くな

給端 華嚴經切請 貳

るやう心懸るが何よりのつと免にて極樂往生の
土産ころ凡夫自力の企及ばざれば自力疑心を
えなれ佛智に信順して他方に任せ奉つるの外な
けれども信後の俗諦門ハ成る丈心を附て嗜なめ
よとの御示しと兼て聽聞申居候然れば此世渡の
俗諦門祖師善知識の掟をあやまらば男も男女ハ
女の道を盡し人にも眞實を以て交り吝嗇慳貪の
心なく儉約質素を本として萬事をつまやかに
して徒らの費をばぶき家の内を穩に治め儉約と
吝嗇とを混雜せぬやうこびへつらひと眞實の謙

遜とを見過らぬやう心得べきとなり殊に女ハ粧
を以て禮儀とするものなれハ度にはづれ分に過
ること覺へざるものなり去れば身のこしらへ
髪飾りも餘り華美に過ぎざるやう去りて夫
に對するにあまり見苦しからぬやう心附へし古
への語にも豈に膏沐なからんや誰を主としてか
たちづくらんやと申すとありと「かや女のかたち
づくりハ本他人の爲めにするわけならぬば左乃
み華美に過るにも及ばざるハ勿論にて垢つかぬ
様身なりと潔よくするが第一と心得べし去れば



朝毎に夫の起出ぬ前に衣物きかへ帯などしめか
 へ身仕舞潔よくして夫の目覺をまつべし夫外に
 出る時ハ留主の間ハ夫にかハリ何くれとなく氣
 とくばり不都合なれやうはたらくべし凡ろ人間
 一生ハ重荷を擔て遠旅するま同きものぞと古人
 も云えれ長の旅路のろの内には天氣長閑に面白
 き氣色を眺める日もあるべし又ハ雨風雪霰難儀
 の旅路もあるものなりたとはいかなる苦勞あると
 も地獄の苦惱に比ぶれば左のみ難儀とも思ハれ
 だたとひ樂みあるとしても後に地獄に趣かばろの

樂は苦みの因にて後悔するとも返りがたし去れば暫しの世の中ハ心に叶ハぬとあるとも頓て極樂往生の樂みを思へば苦にならば國の爲や法の爲や家の爲め夫の爲めなど世に益あるとをなすがこの世滯留の仕事と心得夫を樂しみ進みて勤むべきことなりこれ誠に我國古今無二の有りがたき眞宗眞俗二諦の教へなりと兼て聽聞申し候抑く眞宗の祖師と崇めし御方ハ何人と問ふに賢こくも尊とき雲上の御身にて末代の我等を憐れみ思しめし榮耀榮花の御家を出させられ彌陀の

大悲を知らぬ身は知らせん爲めとて六百年の古しへよ雪にうづもれ氷にとぢられ一方ならぬ御苦勞にて斯る尊き教を弘めろのち代々の善知識も寛よ水の傳ふがごとく朝夕絶えぬ御勸化にて日本國中端々まで行き渡るやう御弘通下され今の大善知識まで雲上の祖師より血脉連綿と御つたハリよて類まれなる有がたき御宗旨にて候ふにろの有がたき程をも辨へば斯る尊とき御教の我皇國にありながら夫をば餘所事に捨ておきて何の不足ありてか此頃世間の尊にハ異國のあ

やしき教なぞよなびく人もまゝあるよし是を畢
竟隣の味噌を酢味ましといふ俗諺の如く我が内
にある米の飯をたべだして隣の焼芋を買喰する
に同じければ愚かなる女の我等が目にはさへ最と
耻づかしき心へ哉と淺ましき限りなく思はれ
候夫に附ても我等ハ不思議の因縁にて斯る有が
たき御國に生れ尊き御法を易く聴聞致し時も處
も障りなく誰憚から念佛申し佛恩の廣大なる
を尊とみ我身の仕合を喜こぶ身となりしハこの
上もなき幸ひと存じ候是れ偏へに佛祖善知識の

御恩ハ申すまでもなく天朝の御恩親夫の恩恵に
返すくも有かたくうれしく候らへば國の爲め家
の爲め親夫の爲めにも格別に御恩報じの真心を
盡さざしてハ叶まじく存じ候若しも佛法禁制眞
宗さしとめの國にてもあらば逆も聴聞するともハ
叶ふまじく又たとひ此御法を弘まり居るとも夫
たる人忌嫌ひて聴聞するを許されどハ五障三從
の女の身ハ思ふばかりにて自由ハ出来ど未來の
大事ハ知りながら尊とき御法ハありと知りつゝ
心のまゝに聴聞も出来ど空く惡趣に歸らんとい

かばかりか悲しきとならん然すれば法義聴聞の
心ある身え國を思ひ家を思ひ夫を思ふ心も格別
に厚ふして萬夫にさからえど夫の機嫌を能く慰
さめ家の内波風なく内外の者よりもなつかるゝ
様心がけなば自づから夫の心も和らき御法聴聞
も美しく出来終にえ家内残らざ御法に入り此世
かぎりの親しみならざ未來永劫手に手を引て同
じ樂を受る身となると此上もなき幸ひと存じ候
わけて女の若きときハ身持正しく品行をととの
へ假初にも人の嫌疑を受ぬ様心を附て慎しむべ

きとなり又子供持ち候らへば男子女子とも十歳
已下は母の膝にあるものなれば母の行儀染み付
き母の氣質も感ぜること多し殊更心をつけて心
中はづかしからぬやうに致すべきとなり夫に就
ても愈く第一御法を聴聞し身も心も佛に任せ奉
つり言ふも語るもみな御佛の御指圖にしたがひ
立つも坐るも御報謝の勤めぞと心得御稱名もろ
ともにも萬の世話に立働くときは佛の光明の中に
棲む身故自らやさしくすなほになる心ばへとな
るものなり猶又前にも申し候やう外國の教にな

びく人の出来候も此御法の有がたき事を知らぬ
故なればせめてハ早く此有がたき程を知らせま
ぼしく候へば品行々状萬事美しく人の感服する
やうに身を慎み候へば自ら御法の光も顯ハれ次
第に惑を翻へして法に歸入するとなるべし左
あらば佛祖への御報謝は勿論國の爲めにい
ばかりか忠義となるべし扱ころ人をも助け我身
も心易く此上の果報徳分は之あるまじく候殊に
御身達二人ながら不思議の因縁にて我等と親子
の契を結ひ候と能く深き宿世の因縁と存じ候へ

は呉れぐれも此因縁を徒らとにせぬやう幾迄も
永き樂みを一處よ結ひたく我身を淺からぬ宿縁
の顯れにて他力の信心を決定し此世も心いたみ
なく氣樂に一生を過し頓て安養の往生を遂げ申
す身となり有がたきと筆に盡し難し最早此節を
呼吸の息も促迫しければ迪も來春までながらへ
んとえ心もとなく存じ候らへば父上の御恩万
一も報ひ申さば先立ち候え勿体なきと只夫の
み朝夕心くるしく候と故此上を彌く兩人とも中
よく睦むく申合され父上よ孝行頼み入申候又夫

々夫を大切にし貞節の道御盡し下され末々の事
まで頼み入候御念佛だに御忘なくば是等のと自
ら守られ返すくも御念佛御忘れなき様偏に頼み
入候あなかしこ

尚々父上御召使の女中も此身にとりてハ殊に
因縁厚き者ゆゑ別して深切に物事相談を盡し
家の世話致され候やう頼み置申候
又書添進じ申候信心獲得せば觸光柔頼の願益
によりて言葉もやわらかに自ら心なき人も感
ぜるものぞと承えり申候人の上に立て下の者

と使には威に恐れて人の随ふやうにするより
も徳に感じ有がたく思ひて勤めるやうにする
が肝要なり猶おみすどのえ久坂家の母上に別
して孝道專一のとに存じ申候

(三) 福島縣平民中村佐平次 伊達郡梁川村の人

佐平次氏は積年蠶種製造に心を盡し終に内外國人
の信用を得てますく其業を精勵し近年に至りてえ
各府縣下の蠶家え豫じめ同氏製造の原紙を購求せ
んと約するもの殆んど三百所に至れりと蓋しうの

地方え養蠶に適したりと雖ども抑もまた同氏積年
勉勵刻苦して製法の宜きを得て繭絲の美良なる
稱して全國第一とす是の如く國産の名譽を取り蠶
家の利を興せしと佐平次氏の功多きに居といふ云
々抑も同氏の國産に功勞あると此の如くなるを以
て畏こくも前に載たる趣を高辻侍從より 聖聽に
達し奉まつるに至れり佐平次氏も亦榮譽の上も
なきもれといふべし左れば同氏は梁川村よては第
一と呼ぼるゝ豪家にて同所なる本派安養寺の門徒
なりとの祖先は信州小山より今の伊達郡に移住し

うの人も御法義を大切にせしものと見れば本國より
一人の僧を請して共に梁川に來り一字を建立した
るが即ち今の安養寺なりといふ佐平次の祖母こ
く女を早く寡婦となりしが家政を整のへ殊に無二
の信者なりしかば慈愛の心深く出入の者ハ之を見
ること慈母の如くし召使のものも表裏なく働きた
るにぞ家道ますます繁昌し法義も至りて寥々たる伊
達郡もこれより多くの信者を生だるに至りしとぞ
此こく女の傳え妙好人傳にも見ゆたり其積善の餘
慶にて今に於てえ巨萬の資産を有し中村氏の一族

類家みな豪富の名ありていづれも御法義を大切に
し説教あれば風雨寒暑の差別なく参詣することゝ
し敢て怠たらざといふ殊に佐平次氏も商業繁多の
中にも朝夕御内佛のお勤を闕たる事なく御本山よ
り御使僧御用僧の巡回せらるゝことあれば家内中
引連れて参詣し毎年二度づゝは商用にて東京に來
られろの逗留中は必だ幾度となく築地の御別院へ
足手を運び今どの御再建の事などにも別して輩敷
の下の御別院ゆへ一日も早く御普請落成あらんこ
とをと大法主殿にも深く御心配あらせらるゝと承

たまはれば精々御取持申上たしとて盡力せられし
甲斐ありて御再建御手傳にとて奥州七州にて第一
等の納金なりしと聞くところに據れば同氏の厚信
なる慈善のこゝろ深きえ感ぜべき事多し今の一
二を掲げば氏が壯年のころ商ひ用にて出府せし時
商人仲間の交際にて吉原にありび一宿せしが翌朝
起床出てまづ盥漱するやいなや斯る不淨の青樓に
ては却て勿体なしとは思へども幼年の時より一度
も闕きたることなき毎朝のお勤をせねば心すまざ
し時處をきらはぞ佛恩報謝のために六字の寶號を唱

へる事なればと思ひ西の方に向て心志づかに正信
傷六首引を低聲につとめしと又同氏は出入の者の
酒肴菓子など持ち來りて音物とするものあれば渾
てこれを賣拂ふたる代價に見積りられだけの金を
積置て御本山へ上納し或は御文庫へとして上納す
るを家法とすと此の如くなれば一家妻妾は固より
奴僕に至るまで同氏が篤信の風に化し同氏の孫女
は祖母のごとく御法義をよるこぶ様にとて名をま
くといふよしなるが年僅よ四歳未だ髪乃額を掩ふ
に至らざる幼女なれども毎朝御内佛へ拜禮するを

樂しみとして心よく朝起し若し起さざに御文章ま
ではたして仕舞へば大きに穢嫌をうこねて更に御
文章を拜讀してこれに聽聞させぬうち朝の食事
をせぬといふ又安養寺の嘗て焼失して普請を取掛
りしが今どは本堂を塗屋にし表門まで立派に建築
し數千圓乃入費なるが乃費用過半を中村一族乃
寄附する所なりとぞ去れを中村佐平次氏の如きは
一家こそつて御法義をよるこび國産を振興してを
奏上を経るに至る實に今生後生とも目出度人にし
てよく二諦相資の御教化を聽聞申わけたる人とい

ふべし

(三)肥前國伊万里代々日蓮宗の檀那なりしが先年交易の爲め英國へ渡り或る日倫敦の市場にて商賣物の約定をなす時相手の英人榮左衛門に向ひて貴殿は何教代人なるやと問ひたるにぞ思ひ寄らぬとに一時不審せしが左のみ隠すべきならぬば我らも佛教なりと答ふ佛教は何宗なりやと又尋ぬるに其時榮左衛門思ふやう我は代々日蓮宗なれども此國に

我宗の未だ弘まらねば此人も知らぬなるべし傳へ聞く真宗は學侶をも諸州に派出せられて外國人も能く其宗意を知ると云へばこゝを方便にて真宗といふが宜るべしと考附き我を真宗なりと答へしに英人をいたく喜びたる氣色にて然らば安心なり此の約定を取結ぶべしとて直組して別れたりされど榮左衛門を其不審ますく晴れど商賣の上にて掛構ひなき宗旨の事を問ふのみならぬ真宗と聞て彼が歡びたる体なるを抑もいかなる理ならんと其日に去る筋を心得たる人の許に往きて今日云々の事あ

り我ら何故とも解し難し願えくを教へられよと云
へば其人を點頭て左もあるべし其を別義にあらざ
都て無宗門の人を兎かく信義を守らざして何事に
よらざ約定をなすに變改すること又詐るとの多け
れば夫らと掛念して斯く問ひしものなるべしと云
へば榮左衛門を成る程夫にて解りたり就て又不審
なるを我國の佛法よは十宗各派とさまくに分れて
種々の宗門もある中に真宗のみ彼が信用する様
なるを是も故あるとかと問へばさればとよ何れも
世間と出世間の心得を説く中に殊更真宗を他宗に

勝れて人間交際上の信義を太切にせよ不實意の事
あるべからざと教へらるゝよしを英人も聞知りた
れば彼が安心の体なりしを定めて其故なるべしと
云ひしに榮左衛門を深く感心して初めて真宗の有
り難きとを悟り昨年歸國するがいなや直さま當時
御本山教務局の七里大講義の坐下に詣て右の始終
を語りてだんく御宗意の安心を聴聞し隨喜の餘り
に先ごろ改宗して真宗の門徒の一人となられた
りと

入瑞華書讀御新編

〔四〕同國小城郡手津驛水田善助

善助氏を若き折より御法義を聴聞し今年六十四歳なる由なるが此地方にては六十已上なれば年賀とて親類を更なり懇信の人々を招き酒宴を開き長壽を祝ふ風習なるに善助氏を自らこの年まで長壽に及びたるを世間の喜びとなさば偶々閻浮の人身を受け稀に弘願他力の一法に逢ひ奉まつり六十四歳まで命を長らへて御法義を相續するを喜びの中の喜びなりとて先頃中同町の正満寺にて親類の他の人を招き年賀の法筵を開かれしが人々其志に感

じ參聽せしもの數多ありしとぞ

〔五〕安藝國佐伯郡葛原村日下周平

周平氏を兼て御法義を聴聞し二諦の教への趣を能く守り第一父の四郎右衛門に孝行を盡したが一體此四郎右衛門を壯年の項より殺生を好みて毎日鐵砲を擔いでえ山へ往くと孝行の心から周平を此事を苦に病み或日父に向て例もお前が悪くいふ御僧方の説教を現世で無益に生物の命を取るものえ來世を必だ地獄に墮て種々の苦みをするを仰せられ

たがお前か平生の行状を見ると死だ後の事が想ひ
像れて痛ましい何ぞ是丈え私の云ふとを聴て殺生
と止て下さいと涙を流して頼めども四郎右衛門え
中々聴だ夫え手前が正直な料見から説教坊主の云
ふとを真に受けたのだ何の死でから地獄や極樂が
有て溜るものか己が毎日山へ往て獲て來た物を肴
に寢酒をたらふく吞て寢ふ心持が手前のいふ極樂
だ己え活て居るうちから極樂だから死て地獄に墮
る氣支えなひと強情を張り通され周平えますく悲
しく迪も親父の邪見が直らぬものならばと覺悟し

て其翌日又父に向ひ何ぞ私の命を下されと云へば
四郎右衛門も不審して其譯を聞くと其事でござり
ますお前か強情で私の異見を用ひぬから地獄の責
苦え目の前のとマア能く考へて御覽なさい鳥獸で
も虫けらでも命の惜い人間と替るとえ無いに其
命をムザくと取て俗に謂ふ死ぬ苦みをさせる其報
ひえ誰の處へ來ませうぞ皆お前の身に集つて永劫
奈落の底へ沈み鳥獸が爲た丈の苦みを受るを當然
ゆゑ夫と知りつゝ私えお前の惡業を見て居るとが
出來ませぬ其故何う死して下さいと覺悟の体で目

よ一ばい涙を溜めながら異見され四郎右衛門も我
子の恩愛と至極の道理に邪見の角も折れたやら急
に周平の前に手を突て誤つた免して呉れ今までを
其處までえ気が附かなんだが言えれて見ると其通
りだ是から行状を改めて持前の百姓に精を出すか
ら死ぬとえ止めて呉れと今までに打て變りし有様
に周平ハア、有難いソソなら心を入れ替て下さり
ましたか是も偏へに如來様の御引接と有難た涙と
嬉し涙に搔暮しが其後え四郎右衛門を今までの殺
生を弗つり止め朝から鋤鋤を持って働らさ殊に説教

があれれば自分が先に立て家内中を引連れ御法座に
近く寄りて御相續を怠らだ又所持の田地の中一反
二畝六歩程の上高を積てえ御僧方を招き御法義を
聞くなど丸で生れ替つた様になりたも全く周平の
孝心からだと聞く人毎に感心せぬえなく又先年照
明寺の住職菅興澄師が御直諭の御供として此地へ
下られ御化導のありし初り周平を御法話を承えり
て歡喜の餘り此大恩の万が一とも報謝し奉り度く
若も御本山にて何事なれ大事件のある節え私の一
命を差し上度しと申出で此趣を同師より上申にな

入久... 瑞華... 講義... 秘秘... 篇篇...

りたといふ信心の御門徒も多いが此周平の様なを
珍しとてある實にや去明治十三年三月御本山より
聞法篤信の上より眞俗に付奇特の行狀尠なからば
他の模範とも相成るとて念珠一連を賞與ありたりと

〔六〕上州高崎田中きく女

此きく女も同所にて藝妓を稼業とし豫て御法義に
志ふかく酬恩社に加入しまた同業のものにも後生
の大切なることを語り説教あるときえられ等を誘
なふて参詣し又を教會所へ寄附せし物なども多か

りし由なるが此ほどもまた高崎及び熊谷の兩驛に
出稼の藝妓數名とよもに資を捨て、紫縮緬の幕一
張を熊谷なる酬恩社説教所へ寄附せしよし此世の
福德を祈り道ならぬ祈願を神佛にかけて神社佛閣
へ物を納むることと彼等が夥伴の常なるが報恩謝
徳のためになせし最と感ぜべき事なりかし

〔七〕江州神崎郡林村某

某氏も同村長泉寺の檀家にして先頃から氣が變し
くなりて晝夜とも家の内を駆廻りてソリヤ己れの

入瑞華叢書 禪苑珠林 卷之九

親分の稲荷さまがござつた早く油揚げに赤豆飯を焚
 け鼠の天麩羅が食ひたいなど、口走るゆゑ此奴
 ンくに魅れたなど家内親類え寄合つて種々評議し
 たれど何ぶん人力の醫藥にえ及ばぬかと此上え此
 奴らの本家本元の京都の稲荷山の稲荷さまにお頼
 み申すより外えないと決着し狂ひ廻る病人を駕に
 乗せて西京へ赴き伏見に稲荷へ至りて祠官乃大講
 義田村貞道どのに會ひだんくれ仔細を述て何卒御
 祈禱を願ひますと云ふとき田村氏ハ暫らく考へて
 此者の宗旨え何だと云ふに眞宗でござりますすと答



繪編華叢書 切篇

入瑞華叢書 秘苑篇

へたれば其時田村氏を膝立て直し然らば此の病人
未だ真宗の法義を深く聴聞せぬと見えたり真宗
の宗意を聴聞せし人にハ狐狸などの魅ものよあら
ば此男の斯く魔物の爲に苦めらるゝを全く法義を
聴き安心立命の地に至らざる證據なり早く此坐を
去り手次にいたり既往の罪を悔ひ謹んで宗義を聴
聞させよと以ての外に寤なめられ親類の者を驚き
て歸宅のうへ長泉寺に詣て住職圓乘氏に此の始末
を語りて御宗意の安心の旨を聴聞したしと請ひた
れば同氏も歡びて世に狐の魅くなど云ふを決して

無きことにて是を神經の狂ひたるが其様に見ゆる
ものなりされば宗意を聞き安心の要を得たる時に
え平愈疑がひなしと懇ろに諭し御宗義をだんく説
き聞かせたれば病人も首を傾けて隨喜渴仰したる
様なりしが夫より次第に本心に復りて藥りも服み
家内の者も今までの迷ひを醒して看病したれば昨
今も大いた全快して此ほど當人が自身で田村氏の
許に來て禮を述べた程になつたりと

〔八〕廣島縣安藝國沼田郡南下安村大下力三郎

繪瑞華叢書 秘苑篇

入瑞華叢書 祿來篇

カ三郎氏は豫て當流の御教化を聽聞し御法義を大
切にこゝろがけ温厚篤實の人にしてその行狀の殊
勝なる事ども最と多き中にも孝心深くして實父及
び繼母に對し孝養怠たらざ異母の弟妹をも愛しみ
つゝ暮し居けるが過る明治元年の七月より父を中
風として身體自由からざる疾に罹り醫藥の外費用
もたかむ事なれば追々活計も困難なる場合に陥り
父母の孝養も兎角心にまかせざるを憂ひ明治三年
のえじめより同所なる賣藥渡世吉崎善助乃方に雇
えれ聊かなる給金を得て自家の暮しに仕贈り忠か

に雇主のため働くうちに折々商ひ用の間隙を
伺ひ雇主に乞ふて自宅へ歸りて父の看病をなした
ど渾て感すべき舉動なるに雇主も末頼母しき若
者なりとして一方ならざ力三郎を愛し遂に明治七年
期満て自宅に歸るに至りしとき若干の資本をも與
へて力三郎に賣藥渡世を營かましめければ力三郎
え一入喜ひその業を勤め相當の利潤も有しなれど
もろれをば専ら父が療養の資となし夜も更行をも
忘れて父の體を按て摩りその心を慰さめなど孝養
におこふらざるうち明治十一年の春より繼母もま

入瑞華譜談切篇

た重き病に臥沈みければ力三郎を毎夜帯を解くいとまもなく身の疲れをも打忘れ父と繼母との薬より寐起の世話やら汚穢しもの洗濯までのことところ無く氣をつけ力を盡せし甲斐も無く繼母を遂に此世を辭し去りしにぞ力三郎の歎き謂ん方かくさてしもあるべきことならぬばとて野邊のおくりうの外までも跡ぬんごろに吊らいけるが今を父親のみおればと猶も心を盡して看病し十餘年來一日の如くなりとて此事を見聞して感ぜぬものもなきほどなりと左れば此事公けに聞えければ昨年縣廳

よりもうの賞譽として金若干を賜えり此程御本山よりを紺紙金泥の六字名号一幅を賞與せられしとぞ此人の行狀をして吾輩が聞く所全く符合するものならしめば實に天晴なる真宗念佛行者の振舞なりといふべし

〔九〕山口縣下長門國阿武郡萩赤川任の母おみちおみちと云ふを兼て御法義を太切に歡び報謝代稱名懈怠なき女性なるが何ごとにも堪忍を身の掟として聊かもえしたなく怒り腹立つなど云ふことな

繪瑞華譜談切篇

入瑞華譜
諺苑
新編

し若し我が心るに叶えぬこと或は自からの考へに
も餘るほどのことあれば佛間に入り本尊の御前に
燈明を供へ香を炷き稱名念佛して心るを静めて後
ち前後をえかりて事を行ふ故に如何なるにも後
悔の臍を噬む如き患ひなし常に此事を人に語りて
云ふ譬へ世間の事なりとも凡夫の身にて思ふが儘
に取計ひたらんに自からの道理に叶えど無理な
るとあるも必定なれば偏へに如來聖人の御指圖を
受け奉るより良えなし穴かしく假にも怒りに乗し
又の名聞利養に心を暗まされて私しの心をもて事

と計らふも勿休なきとならばやとていと殊勝に物
事を振舞へり扱て此の女性の履歴を聞くに夫と友
之丞と云ふ今より十餘年の昔し長州の藩主が舊幕
府に忌れて元治元子の年の京師の争亂を引起せし前
後藩士中に正黨奸黨の兩派おこりて或は勤王攘夷
と主張し又は佐幕開國を唱へて互ひに相闘きたる
折り此の友之丞も同國厚狭郡舟木の宰判職(代官な
り)世間にてこれを郡奉行といへしものこれなり)に
てあましが深く國難を憂ひ斯く一藩内にして黨派
を分ち父子兄弟敵味方と別れて修羅の衢に身を果

入瑞華業謹誌

すえ第一私怨をもて公義を擾ると云へるものにて
主君へ對しての不忠此上やあるべき殊に近來皇國
全体の形勢を考がふれば内に王道陵夷して武威
また古へのごとくならざれば外に夷狄隙を窺ひて動
もすれば釁を啓かんとの結構隠れなし斯る折柄に
空しく有爲の人々を斃すえ國の爲め家の爲に忍び
ざるところなりいかで正奸を一和せしめ共に忠義
と盡すべき策を運らさんと思惟し我身を元來正黨
なりしを枉て奸黨に入り心を碎きて調和の周旋に
力を盡したれども此甲斐なく奸黨を次第に勢ひ隘

りて正黨の攻撃に敵し難くいよく自滅すべき氣色
となりしが友之丞の志ざしは却つて身の仇となり
て世に口惜きとに思へどもさりとして今更ら我を云
々の心ろありて奸黨にハ属したるなり仍て再び正
黨に歸らんと云んも耻かしく是までの運命をあき
らめて武士の意地に腹切て果んと覺悟を决め夜を
こめて舟木より廿里も隔たりたる萩の我家へ竊か
に立歸り妻のおみちを招きて事の由を細々云ひ
聞せて斯の如く我らが運命拙なくして是までの苦
心も水の泡となりたれば切腹と思ひ定めたり就て

え我が果たる後ち其方ハ如何して世を送るやと問ふにおみちえつくく仔細を聞て落る涙を拭ひあへば健氣にも思ひ切りたまふものかな妾もおん身が國の爲に身を果し玉ふと聞いていかで生存へて居らるべきか其刃にて諸共に死出三途の路に赴き冥世を掛ての二世の契りころ願はしけれと思ひ入て云ふを友之丞ハ押留めて其志しハうれしけれども斯くてえ此家のだんぜつして我が死後を訪ひ吊ふものもなかるべし現世當來の二道かけたる貞節を思ふならば今の死を思ひ止まりて赤川の家の長久を

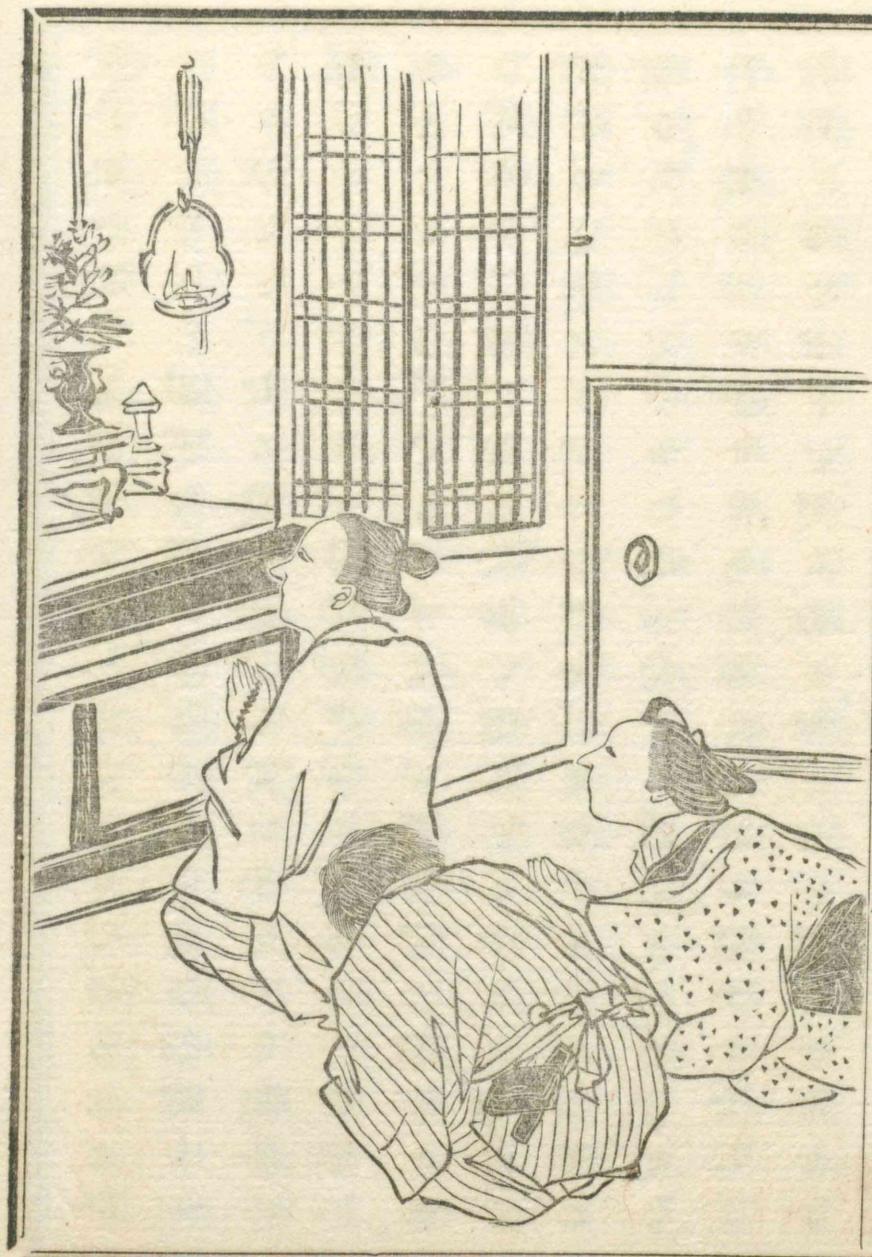
謀るべしと事を分たる夫が詞におみちは忽ち感悟して敢てまた自殺を云ハだの玉ふおもむきハ心得たり御心安かれ跡々に生存へて第一にこの家の再興をはかるべく次に御先祖并におん身乃亡跡を吊ふべし又妾がのちくの世を渡る營業のとはゆめく心ろをくるしめ玉ふな如何にもして見苦しからだ赤川の後家を立てとほすべし唯望ましきえ御身が臨終の正念をみださざ潔よく國事に身をなげうちたまへとせき來る涙を押隠して雄しくも述べければ友之丞え大に悦び我も夫にて安堵せり然らば

入編 瑞華叢談 初篇

今生の暇乞に水盃せんとして心しつかに盃を取交し
扱て切腹の装束を持来れと云ふ時おみちえしばら
く考へしは此たびは御切腹を主君より申付られし
にもあらざ然らばたゞ平常の服にてまうあうばさ
るべけれと云ふに友之丞も實に尤もと其まゝに立
出でしは意氣地を立つる武士の習ひとしてさし名
残のいとおしき妻の顔を見返りもせど舟木をさし
てかへりけるが果して此夜の詞にたがえど其翌日
とか友之丞は我が居間にて腹十文字に掻切りて美
事に最期をぞ遂にける其翌日友之丞に附従ひたる

手子衆(足輕)二人が舟木より走せ来りてみち女に遇
ひ遽たゞしく切腹の事を告ればみち女は今更代や
うに覺えて不覺の涙に暮れけるが稍ありて其義ハ
妾もかねて知り唯御切腹の体え如何にや見苦し
きともなかりしかと問へば否、御居間に端座あり
て美事よ御腹を召され果て玉ひしと云ふに然らば
安堵せり願ふは是までの懇志に愛で、夫の亡屍を
送りたまえらばやと云へば其え勿論のとなりと
手子衆は走せ歸れりみち女は夫より佛間に入りて
念佛し終り扱しも夫は國の爲に斯く墓なき身とな

入
 珠
 華
 叢
 詠
 初
 篇



られたるに其妻が家の中に安座して居るべきにあ
 らざと門外へ出で稱名しながら亡屍の來るを待つ
 程に既にして日も暮れたり折しも嚴冬の寒き夜な
 るに雪催ひの空暗く風また烈しくて肌を切らるゝ
 如きなれどもみち女は是を苦しとも思えづ高らか
 に念佛して夜の曉るを待つに稍、日の登るころ舟
 木より夫の死骸を昇き來り聞しより又た見れば
 哀傷の涙やる方なきを兎角して野邊の葬りも濟ま
 せ七日々々の日柄も立ちて早くも百ヶ日の過ぎた
 ればみち女を兼て夫に誓ひし詞もあり赤川の家の

入私... 華... 諺... 初... 篇...

しきとに就て其一つ二つを記さん去る明治九年
十月前原一誠ハ其黨奥平謙輔横山俊彦らと不軌を
えかりて舊藩の諸隊と糊口に究したる士族どもを
煽動しつゝ此折り熊本なる神風連がりの地の兵營
を焼討して亂を起したるに備へ且を官軍の御味方
にまいらんと偽りて彼の明倫館に屯しけり抑も
此の前原を維新のころ東軍と戦ふて戦功も少なか
らぬをもて朝廷の御思召も他に越えつゝ事平らぐ
の後ち参議の顯職を恭うし殊に賞典祿すらいと多
く賜えりて世の中に時めきたれども其性の頑な

るより衆人に容られど口惜き事の重なりければ官
を辭し家に歸りて表邊を耕作を業とし風月を樂し
むなど披露して内々を時機を待て叛逆を企てたる
なりとの事を此折にぞ人々知りけるさる程に萩
の市中を騒動して老たるを東西に逃まよひ若きを
南北に奔走して宛がら鼎の沸くが如く特に明倫館
を賊兵の屯ろしたる所なれば此處らに逃て人一
人もあらざなりしにみち女ハ多くの生徒どもを誠
めて決して他に避けし免なまじぬ遽て惑へる
ころ怪我をもすれ此方の人がらを正しくして業を

執らば必らぞ兵士の亂暴に遇ふべからざと諫め勵
ませしが果して一誠謙輔らハみち女の膽勇と生徒
の静まりて動かざ教師の命令を守りて常の如くに
業となすに感じて兵士を警し免て粗暴の舉動とな
さしめざりしと云へり又先頃大洲教正が巡教の折
も親しく森川の宅へまゐられみち女に面會して生
徒の行状を見られしに總て客來の時を號合にて生
徒を進退し一同御挨拶といふ下に一統を頭を下げ
其餘ハ左右を顧みぞ一心に業ヲ就き居たりと又み
ち女の考へにて生徒の中より世話掛又監事等を選

入
瑞
華
叢
書
初
編

ぶに此人え必らぞ御法義を喜ぶ人に限るといふ是
れ無法義の人ハ他の生徒を取扱ふに残酷なる所業
あればなりといふ是も亦た感ぜべし又生徒酒席に
て三絃をひかしめぞ人ありて其の由を問へばされ
ばなり酒席の興を添るに三弦を弾くハ藝妓の業な
り良人の子にして後來人の母たるべきもの、所爲
にあらざと答るとぞされば此らの事早く縣廳に聞
ゑて去るころ金二千正を賜ハリ懇ろの褒状を添へ
られたり

一金二千正

士族 赤川任母みち

入... 華... 叢... 詩... 秘... 篇...

右當年四十八歳に相成り生質温和にして身嗜よろしく夫友之丞え七ヶ年以前死去して其後別て質素節儉を盡し兼て女業勝れし故先年より懇意の娘ども織機縫針乃傳習相たのみしものは懇に教ふるの風評ありしより昨春秋の頃より稽古人日々相増し當節にてハ七十人餘罷越しなりしかるに女業の教へのみならざ常々の行狀禮義且花美に移らぬ様質朴とおもとし經濟算盤等へ導くの説諭も相届き數多の弟子引立よろしき故次第に精業の者夥しく誠に諸人乃鑑とも可相成美事にして志神妙の至り婦

人にも稀なるものにつき奇特に對し前書の通り褒美として遣し候條以後引立あるべき事

壬申五月晦日

山口縣印

又明治七年に勸業局より左の金を下されたり

一金二十圓

赤川任母

但一ヶ年兩度十圓宛渡方之事

右先年來自費を以て織殿相開女工引立居候處勸誘行届候耳ならだ婦女之教訓宜敷哉に相聞へ漸々盛に及び衆女生産の一助とも相成候段誠心之至り奇特之事に候依て出格之詮議を以引立中前

入... 華... 讀... 秘... 篇...

書之通り當年より被賜下候條一入可有勉勵候也

明治七年七月

勸業局印

みち女の織物えまづく進みて去る八年中京都府
博覽會へ紺織を出したるは製造よろしき旨の賞詞
ありて有功賞銅牌を同年十一月に贈られたり猶ほ
此の織の事よ付てえ木戸公にも深く御配慮ありて
岩倉公へも御尊さあり其織りしといふ織を進ぜら
れしに右大臣殿ハ殊の外御賞美ありて此の織殿創
業の趣意を聞たしとありしかば其ころ在京せられ
し松原某より左の書面を差出されたり

赤川任母

右者去る子年國難之初夫友之丞儀國家を憂ひ死
亡せしめ示來獨立方向之志願よりして小學休業
之時間近隣之女子供へ女業傳習仕候處日増生徒
多人數に相成自宅手狭に付去る申年頃萩明倫館
内稽古場一ヶ所貸渡追々追々盛大に引立候處
右ヶ所入用ニ付士族有地何々に抱屋敷買上右女
工場に貸渡當時女生徒三百人位有之萩市中其他
分社も有之候處終に千人位も引立仕度目的を
以て引續教授仕候尤稽古人七八歳より十五歳を

入札... 華... 談... 初篇

期に入込しめ織木綿營業にて二人口ちを糊し候
位よ塾達仕候上退塾爲致候事

但賣捌之代價利足利益を以て生徒等級よ依て
分賦仕候事

其後ち十年中舊藩主毛利元徳君が歸縣あり志折り
工女中へとて金十五圓をおくられしがみち女の徳

望いよく隠れなく遂に御本山へ聞ゑて去る六月
中日野中教正殿御巡教のみぎり左に通り乃書付に

御物を添へて下されたり此人の如きハ誠に今世
に有難き女性なるべし

山口縣下長門國阿武郡萩赤川任母

右從來法義篤信の上より婦徳堅く蚤に産業を起
し兼て兒女子の風俗をも改良せられ其功不少候
趣き奇特之事に候今後倍眞俗二諦之宗義保全候
様國家之爲め勉勵有之度候事
但し今般巡教土産と志て別紙目録の通附與候
事

目録

- 一 紺紙金泥六字尊號
- 一 女子善行録
- 一 幅
- 三 部

入瑞華叢談秋

一金千疋

明治十三年六月十七日

〔十〕千葉縣下安房國長狹郡天津村富川總兵衛
總兵衛氏も同村善覺寺ノ門徒にして幼けなきころ
より孝心深くして性質まことに老實しく直ほなる
ものなりろの母なる人も當流の御教化を聽聞し深
く難遇の法門に遇ひたてまつり永生の樂果を得る
ことを喜こび斯る御謂れを聽聞申わけたるも偏へ
に御開山様の御出世あそばされたる御恩なれば責

てえ其御舊跡を巡拜して師恩の厚き事をも知らば
やとて御舊跡を巡拜したるほどの人なりしが總兵
衛も此母に育てられたるだけありて若きころより
二諦相資の御宗旨を聽聞して無二の信者とあり常
に報謝の稱名怠たりなく同行打寄たるときなどハ
専ら後生の大事に就ての談話をなし世間の事に言
ひ及ぼすこと無かりき昨年の夏ふと病に臥したり
しが同行を枕邊に近づけていゝけるやうハ我身え
老病のことなれば所詮今どハ全快覺束なしおのゝ
方よ油斷なく御法義を相續いたされ候へ逐付御淨

入瑞華叢談初篇終

士にて御對面申さんことを待つばかりなりと懇
るに暇乞ひをなせしがるの後病ひも稍輕快にいた
りしが本年九月の十日ごろより又も病薦に就き次
第に身神ともに疲かれ同月廿二日の夜七十三歳を
一期として眠るが如くに稱名の息絶たり豫て病中
にも手に珠數をすてぞ唯佛恩報謝の稱名をよるこ
ぶ外敢て世間の事をいえずりしころ殊勝なれ法名
ハ釋嚴達といふ辭世よいえく
願力の不思議が今をあらえれて彌陀の淨土へ參
るうれしさ

と又手翌廿三日に葬送の折檀那寺のお住持佐々木
誓鑑氏が豫て御法主様より下されたる法名を尋ね
られしに嫡子の惣七を早速これを取うつし申ける
ハ亡父が何時書きたるにや過去帳へ自筆にて恰か
も二十二日のところに釋嚴達富川總兵衛年四十五
と記しありと云ふにぞお住持はじめ親類の外ま
でもうの往生したる日と符合せし奇なことなり
と語り合へりしとぞ實にありがたき信者にてぞあ
りける

繪瑞華叢談初篇終

群馬県立図書館



0672227-6